

# キャリアデザインの時代(その二) : キャリアデザイン学を構築する上での日本人の個の問題他

小門, 裕幸 / KOKADO, Hiroyuki

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

139

(終了ページ / End Page)

159

(発行年 / Year)

2009-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007548>

〈研究ノート〉

## キャリアデザインの時代（その二）

### —キャリアデザイン学を構築する上での日本人の個の問題他—

法政大学キャリアデザイン学部教授 小門 裕幸

自由の国、米国という社会が変化の中で、アングロサクソン文化を背景にしてキャリアという概念が生まれ育まれた。その研究を日本で行う場合、現代という時代を捉える歴史認識や日本人という特異な文化を共有する民族的特徴に係わる研究はさけては通れない。またキャリアデザイン学として体系化するには、これらの点を踏まえた個の認識の仕方についても固める必要があるだろう。本稿では、まず、欧米とは相違する日本の個の認識に関しての先達の捉え方を、①維新の時代の福沢、洪沢、後藤、②終戦直後に論陣を張った丸山、川島、大塚について紹介した。そして③最近の知識人の議論として、(i)社会学者山根のタテ社会論、(ii)欧米での留学生活も長い心理学者河合隼雄の母系社会論、(iii)欧州に詳しい歴史学者阿部謹也の世間論、(iv)ロングセラー『日本の個人主義』を書いた哲学者西尾幹二の日本人論、(v)哲学的著書を残し宗教にも詳しいジャーナリスト山本七平の空気論、そして、(vi)視野の狭い合理性に欠ける島国的な民族性に対する猛省を求める、偉大な歴史作家、司馬遼太郎の自立なき個の集団主義論や(vii)元通産官僚の経済評論家・歴史作家堺屋太一の第五の文化圏論、さらに(viii)民俗学的視点から日本人に固着するニヒリズムから解く評論家加藤典洋の「べしみ」「もどき」論、最後に、(ix)ロンドン大学で長きに亘り教鞭をとり自立した個による「下からの資本主義」への脱皮を説く世界的経済学者森嶋通夫の「上からの資本主義」論をとり上げている。さらに、21世紀の日本のかた

ちを提案し法改正の基本となった、「日本のフロンティアは日本の中にある—自立と協治で築く新世紀—」と題した21世紀日本の構想懇談会報告書と「統治客体から統治主体へ」と高らかに謳いあげた司法改革審議会意見書などから、今の日本人の個の認識に関するのコンセンサスを探った。

その上で、「キャリアデザインの時代」シリーズの中間まとめとして、冷徹な資本主義社会との関係性の中で生きて行かなければならない現代日本の個は、「自らの意志で自分にとっての良いキャリアを選択することの意味を自覚すること」に救いがあり、それが自己に改革をもたらし、ひいてはよい社会への変革につながるのではないかとの私見を述べている。

キャリアデザイン学を構築するのであれば、それはリベラルエディケーションの議論にも密接に関連する。産業中心ではなく個を軸に据えた社会への転換を探らざるを得ない昨今の社会情勢に鑑み、キャリアデザイン学部の重要性を訴えたつもりである。

### Ⅲ キャリアデザイン学を構築する上での日本人の個の問題——我が国の経済社会の変貌と日本人の個の認識——

#### (1) はじめに

1980年代、我が国は世界の製造業大国・金融大

国に躍り出る。高度成長を遂げた日本に対する礼賛論は、1990年代初頭一転して異質論・否定論に変わる。日本という国が非難の対象となったジャパン・バッシングである。日本異質論者の代表格のひとりが、オランダ人・ジャーナリスト、カルフ・ヴァン・ウオルフレンである。彼は「人間を幸福にしない日本というシステム」という著書を著し、日本社会に潜む偽りのリアリティ（事態の誤った説明が続く限り存在する）やシカタガナイの政治文化、序列システムが非公式の権力構造となっていることなどについて鋭く指摘し、そこには市民（シティズン）の存在はなく国民（ナショナル）は臣民（サブジェクト）として巧妙に手なづけられ、精緻な官僚による独裁国家が造り上げられていると断じている。その原因は国民の根本的な無関心と根本的な無能力にあると手厳しい。すなわち個の問題である。ウオルフレンは「ある共同体の成員が、互いを恐れず個人的な信念を表明する勇気と、それを行動に一致させる心構えを持っているとする。別の共同体の成員は他人の不興を買わないかと互いの顔色を絶えずうかがい、びくびくしているとすれば、前者の共同体の方が政治的に成熟しているといえる<sup>(1)</sup>」と市民としての日本人について率直な考えを述べていた。海外の欧米人コミュニティで暮らした私にとって強く心に刻み込まれた言葉である。

その後、中国の台頭が予感される時代となり、彼ら欧米人の攻撃的主張は影を潜め、視界から去った。バッシング (bashing) はジャパンバッシング (passing) に変わり、今や日本の国力は世界での競争力では30位 (IMD調査2007年)、一人あたり国民所得でも18位に低迷する有様で、ジャパナッシング (nothing) と揶揄される状況にある。日本たたき論者 (ジャパンバシヤ) の論点の根源は個の自立の問題にあり、人間中心社会を形成し得ない日本、欧米的個の確立ができていない点にあった。

とりわけ、アングロサクソンを中心とする欧米諸国は、人間悪として嫉妬性を回避し、タテ構造が巨大化し権威や権力が巣くうことを極力廃そう

とする思想・風土が醸成されているように見える。世の中の変化にあわせ法律を次々に改正し積み重ねていく慣習法や厳罰で臨む性悪説に立つ法体系をつくりあげている。それに対し、日本は権威がはびこる集団主義の中で、多数のお山の大将をつくろうとするタコソポの上下関係（理由なき偉い偉くないの差別）が維持され、自律的人間の形成が難しい風土にあるように映る。裏ではすさまじい嫉妬が渦を巻いているにも拘わらず、性善説に立ち権力者による操作性の高い法システムを構築してしまったのではないかと私は考えている。

この章では近代という大きな歴史のうねりの中で、日本人の個に対する認識が、どのような変遷を経たのか、そして、現在どのような状況にあるのかをまとめてみたい。そして、海外にいる日本人が、そこで、日本とは何かが違うと感じているもの、その正体が何であるかを考える材料を提供したい。それは、海外から見て日本が異質であると思わせるものであり、要すれば日本という国の特徴である。

近代を始めようとした清新だった明治維新の初心の時代と第二次大戦直後の思想的混迷と悔恨の時代の思想家を辿り、戦後研究された社会学的・経済学的な分析成果も概観する。そして、経済が右肩さがりになって以降の日本について、いわゆる悩める「空白の十余年」の間に日本を代表する知識人が提示した日本の将来像のなかで、個の問題がどのように扱われているのかも見てみたい。我々の関心事から言えば、キャリアデザインという考え方がいかに重要な概念になってきたかを考察してもらえればと思っている。

## (2) 欧米とは相違する個の認識

### ① 維新の時代 欧米的な個の自立した社会に向けた挑戦 (福沢、渋沢、後藤)

新しい時代をつくろうとした明治という時代、理想に燃えた先達は日本人と欧米人の個の認識の差に気がついてた。愕然と呆然と彼我の差を眺めていたのではないかと思える。彼ら

は率先して、「お上にすがるのでなく、個が真に自立して、自分たちの力でつくりあげる社会」を夢に見たのではなかったか。教育の分野で実行しようとした福沢諭吉しかり、リスクを理解する人たちから資金を集めて自分たちで経済を動かそうとした渋沢栄一しかりである。官僚となり東京都知事となり近代的街づくりの範を示してくれた後藤新平も同様であった。

明治維新時に欧米を見た彼らは、改革の意欲にもえた。その原点は個の自立であったと捉えてもよい。福沢は、二度の訪米だけでアングロサクソンの世界のなんたるかを嗅ぎとり欧米の近代の思想・アメリカの精神の本質を伝えることによって日本人を叱咤激励しようとした。彼は、独立という日本語を用いるが、「独立自主（自己の尊厳を自分たちで守ること）」の精神について、「一身の独立なくして一国の独立なし（国民一人ひとりが独立しなければ、国家の独立などありえない）」（『学問のすすめ』）、そして、政府におもねるのではなく「民」であること、「私立」であることの重要性を強く主張した。

パリ万博に参加し欧州の近代の息吹に感銘した渋沢栄一は日本で始めて株式会社を設立、また始めて銀行を設立するが、欧米的企業家第一号として、人が自立し自分の夢を描き（自己）実現していくことの重要性を説いている。

また、ドイツに留学した技術者で役人となり、局長として台湾でのまちづくりを成功させ、東京市長となり現在の東京のまちの基幹をつくった後藤新平も、独立自主の精神を理解する企業家精神溢れる政治家であり、社会の構築を自立する人に求めた。「人のお世話にならぬよう、人のお世話をするよう、そして報いを求めぬよう」という彼の自治三訣は有名である<sup>(2)</sup>。

## ②終戦直後の動き、日本的近代に対する悔恨

現代の日本は、タテマエとしての近代を実現したもの、ホンネとしての近世を残している。資本主義社会の構築を曲りなりにも（日本的に）

行ったが、欧米が啓蒙主義の下で、通過した「近代」という思想的認識が根付いているとはいえない。「自立しない日本」、「近代を経ない日本」について、戦後の学者（思想家）、大塚久雄、丸山真男、川島武宣はこの事実強い懸念を表明している。

明治期、我が国は欧米列強と互すべく急ごしらえの国造りを断行した。産業を興し、法を定め、軍隊を整備することによって、近代という国家の体裁は整えた。近代という「外見」においては優等生であった。しかし、欧米近代をつくりあげた自立する強い個や近代合理主義の思想については捨象する。個の自立ではなく、従順・忠実な自立しない個たる臣民を育成することに国力の基礎を置かざるを得なかった。欧州が中世から近代に脱皮したとき、自由と民主などの思想を創り上げ、市民に啓蒙するが、我が国はその啓蒙的段階を放棄したのである。しかも、新しい国家建設に燃えた、はつらつとした日本人に流れていた自主自発的精神も国の形が整うにつれ官僚化の流れの中で失われていった。要すれば、近代というタテマエ（形）をつくるがホンネは違うところに鎮座する巧妙な二重構造を作り上げたのである。文武両道の優等生にはなりえなかったのである。

高名な経済学者である大塚久雄も、政治学者たる丸山真男も、法学者川島武宣も、鋭く現実の日本社会を捉え、近代合理主義の基盤たる個の不在の重大性に気がついていた。

大塚は、1946年に「今やわが国が政治・経済・社会のあらゆる分野にわたって徹底的に民主化されなければならず、また識者も一人残らず民主化を指導原理としているわけであるが、民衆が……（親心）的雰囲気なかでひたすら恭順な、自主性のない人間類型に打ち出されているかぎり、一体民主主義は可能なのであろうか」<sup>(3)</sup>と、日本人の自立性への疑問を提示している。一方、丸山は、ヨーロッパの近代を、道徳などの諸価値についての選択が、個人の良心や民間の団体の決定に委ねる社会（価値中立

的)と認識し、明治維新以後の日本を、国家が個人の内面までを支配する社会と捉えた。日本人は、権力や権威に従順で、頂点に仰ぐ支配者たるもの(究極的には天皇)との関係性や距離に応じて個人の序列が決まり、お国のためとか天皇万歳という表現に見られるように、個人の意志ではなく支配者の意をそのまま受けて行動している(超国家主義)と指摘し、そして、日本人を「自由なる主体的意識が存せず各人が行動の制約を自らの良心のうちに持たずして、より上級の老(従って究極的価値に近いもの)の存在によって規定されている」存在と喝破した。日本人の中に自立意識は認識できなかったのである<sup>(4)</sup>。

川島は、日本の家族秩序を封建武士的=儒教的な家族制度と庶民家族制度に分類する。そして、前者を権威と恭順の関係による秩序と規定し、その人間精神は、自らの内面的な自発的服従ではないとし、後者についても横の協同関係による秩序であり、その集団は暖かな人情的情緒的雰囲気支配しているため、独立の個人としての自分を意識することは不可能であると断じている<sup>(5)</sup>。

### ③最近の認識 社会学、心理学、歴史学、民俗学およびジャーナリストの視点

#### (i) タテ社会

社会学者中根千枝は、日本社会の同質性に着目し、社会学的に単一社会としての集団の特性の研究を行い、同じ単一社会でも日本には固有の特徴があると分析している。日本社会は、個人が仕事などを通じて結ばれる小集団(せいぜい10人まで、社会学的にはプライマリグループと呼ばれる)を中心に生活が展開され(家族関係はこの小集団に劣後されるのが特徴)、その小集団が階層化し序列をつくりながら大集団を形成し、さらに大集団同士が並列的にしかも競争的に存在するという構造にある。しかも、その大組織というフォーマルなタテ関係に重なってインフォーマルなタテの構造が複雑に絡み合

った社会をつくっている。個人はヨコではなく、三角形の底辺のないタテのタコツボ的連鎖のどこかに埋め込まれ、そのグループの意志決定が、情緒的な人間関係に左右されるのが大きな特徴である。欧米の論理性を基本に意志決定される集団とは極めて対称的な差違をもった社会である。小集団の成員たる日本人は、小集団内での人間関係の密度が高すぎて個としての単位の認識は極めて低調とならざるをえない。個人は、その集団に帰属し集団のルールに従っている限り必要な情報は供給される。集団の規範の範囲での行動に限定されているため、窮屈ではあるが相応の自由度があり、安定的生活が確保されているといえる<sup>(6)</sup>。そのような中での個の自立の必然性は見いだしがたく、欧米的な自由という尺度でみるとかなりの拘束を受けているように観察される。しかし、一方で、自立とは逆の「甘え」と称せられるエゴイズム(自己中心的考え方)を生じさせているのも大きな特徴だ。

また、情緒的な大集団内の上下の関係は、上が強くなれば権威主義、下が強いと(日本的)民主主義と呼ばれ、欧米のような個々人の約束や契約に基づく接点が設定(欧米的協調)されないので真の民主主義とは異なった平等主義が猛威をふるう<sup>(7)</sup>。

日本は、異民族間の闘争・調整に明け暮れた歴史を持つ欧州諸国とは異なり、地勢的な独立性が極めて高い。そして、地域的な差異性も、江戸時代以降の中央集権化や明治以降の一元化される学校教育、そして戦後の東京一極集中化(同質化・標準化)により、世界に類い希な巨大な人口を持つ<sup>(8)</sup>、戦時中の言葉を借りると「万世一系・君民一体」の同質社会(相対差が小さく共通性の重要な社会)<sup>(9)</sup>をつくりあげた。日本列島という閉ざされた同質空間を維持した日本人には、欧米社会が生んだ義務とか権利などのルールをつくる必要がそもそもなかった。そこに、明治政府は、自立した個人と個人との関係を前提にして機能する約束や契約や社会全体の秩序を強制するルールを導入したが、

「法とは社会の国家の骨格ではなくて、全体の動きを不当に乱す者に特殊な細部の手当として適用されるもので、専門化による技術的なものとされやすく、全体社会を規制する原則となりにくい<sup>(10)</sup>」と中根が指摘するように、特有の秩序構造を生みだしたため、欧米のような法意識が醸成されていない<sup>(11)</sup>。

## (ii) 母系社会

文化庁長官もつとめた心理学者、河合隼雄（後述の21世紀懇談会会長）は、自らの欧米生活を踏まえ、「切断」を基本原理とする父系社会の欧米と「包含」に特徴のある母系社会である日本とは根本的に文化風土が相違し、日本に欧米的自立社会を形成することは一朝一夕には困難であると指摘する。その上で、グローバル化の大波が世界に伝播している中で、それ相応に自立を意識することは極めて重要であると問題提起している。

父性原理は主体と客体、善と悪、心と体などすべてを区分し分類する。それに対し母性原理は、すべてのものを区別なく包みこみ、かつ、そのなかで、ある特定の「範囲」を限定するが、その中では、すべてのものが絶対的な平等性をもつ。日本では個人に与えられる「場」が重要で、近世までは「イエ」、近代とりわけ戦後社会では「会社」がその場となる。個人にとっては自分より「場」が優先される。従って、個人としての意見を求められても即答はできず、「それは聞いてみないと、私の判断では」とか、会合などでは「皆さんのお考えは」と逆に聞きなおしたりすることになる。交渉の場合でも、飲食などを共にして親しくなった上で話を切り出したり、先に譲歩したり、あいまいな表現をしたりする。要すれば、場の共有関係をつくった後で交渉が始まるのである。父性原理の欧米人のように個人としての意見を明確に最初から表明し交渉するような、ビジネスライクという言葉があるが、そのような文化風土にはない。また、母性社会では、成員である個人が「個人」の重要性を認識すると、つまり個性を感じはじ

めると集団に問題が生じる。個性とは他と異なるということであるから、「全員同等」あるいは「平等」の原則を破ることになり、「出る杭は打たれる」や「足を引っ張る」という世界が現出するのである<sup>(12)</sup>。

## (iii) ヨーロッパに詳しい歴史学者・哲学者の日本人論

ヨーロッパ中世に詳しい歴史学者、阿部謹也は世間論で、哲学者西尾幹二はロングセラー『日本の個人主義』の中で、日本人が個の深刻な問題に気づかずに欧米化を進めることが、政治的にも学問的にも日本社会の混迷を深めることに強い懸念を訴え続けている。

阿部は、日本人は直接社会と対峙するものではなく世間との関係の中で存在するものとし<sup>(13)</sup>、人間関係の世界である世間はかなり曖昧なものであるから、その曖昧なものとの関係の中で自己を形成せざるをえない日本人の個は曖昧なものとならざるを得ない（自立は困難）と世間論を展開する。日本人は世間に監視され誰かの権威にすがって生き、協調的であるが没个性的で序列的・権威主義的になる<sup>(14)</sup>。そして、世間に囚われる日本の個人は限りなくエゴになる可能性が高い<sup>(15)</sup>と指摘する。そして、日本人の個の認識は、絶対的な神との関係の中で自己を形成することからはじまった欧米の自立した個人とは決定的に異なると断ずる。日本には人権という言葉はあるが、言葉だけであって、真の意味の人権が守られているとは到底いえず、同時に世間がこのような状況を許してきたと言う。欧州では、キリスト教の告解が自己の内面を見つめさせ、さらに12、3世紀の若者の都市への移動が世間たる伝統的共同体からの解放につながり、孤独の中で自分の生き方を考え哲学的思考を強めざるを得ない環境に追い込まれ強い個が形成された<sup>(16)</sup>。その後、個人は国家や社会と対決し、長い年月をかけて自由と民主主義の重要性を理解する市民層が形成されると歴史過程を説明する。そして、日本人にとって世間は変えられないものとする諦念がある限り、

社会変革は近代思想において可能とされるけれども日本人には無理である<sup>(17)</sup>と手厳しい<sup>(18)</sup>。

ドイツ留学の長い西尾は、「個人では小心・意志薄弱、集団で大胆となり、他人に悪感情をもたれることをおそれ、正しい自己主張ができない」と日本人像を的確に捉えている。欧米諸国は、法を社会の軸とし、それに基づいて正義が貫かれる法治国家であるのに対し、日本は法よりも集団内の情に訴えることを優先するシステムであるとする。そして、最終的には自ら銃を持って国を守らなければいけないことが常識化している欧米人に比して、日本人は、個人と近代国家との合理的な関わり方の訓練も受けず、経験もしておらず、国防意識が恐ろしく幼稚で国家意識の欠如している国民であると酷評する。「近代のまっとうな個人主義も国家意識も身に付かぬうちに、(ポストモダンの時代に突入し)、………錯綜した混乱のなかを無自覚に生きているにほかならない」と批判している<sup>(19)</sup>。

#### (iv) ジャーナリストの日本人観、空気論 (極度の自己否定的正義浮遊的集団主義)、農耕社会論や第五文化亜大陸論

哲学的著書を残しユダヤ教・キリスト教に詳しい山本七平は空気論により、そして偉大な歴史作家、司馬遼太郎は「このくにのかたち」という表現で日本人論を展開し、個の自立ができていない近代の日本的集団主義を強く批判している。彼らは、数百万人の犠牲者を出した戦争の責任はそこにあるとして、視野の狭い合理性に欠ける島国的な民族性に対する猛省を求めている。また、元通産官僚の経済評論家であり歴史作家でもある堺屋太一は、日本の経済発展・技術適応力の謎を歴史的に解き明かし日本文化が欧州キリスト教文化圏・イスラム文化圏・インドヒンズー文化圏・東亜中華文化圏のいずれにも属さない異質な個が集団を形成する特殊な第五の文化圏<sup>(20)</sup>であると論じ、日本人は、グローバル化する21世紀において、脱亜入欧路線を継続し、その異質性からの真の脱却を

図るのか、はたまた、第五の文化圏として世界に向けて異質性を説明し理解を求めるのか、その選択に迫られているとしている。

山本は、第二次大戦中の日本軍を例にとり、いかに日本的集団主義が合理的な意志決定を阻んでいたかを空気という概念で説明する。戦艦大和の出撃は論理的に明確に無謀と断定できる作戦だと判断しながら実行された。無謀と断ずるに至る細かいデータ、つまり明確な根拠があり、意志決定に参加した人は全員海も船も空も知りつくした専門家のみで構成されていた。その彼らが、つまり米軍の実力を完全に把握しているところの熟達のエリート集団が、出撃という間違った決定をしてしまう愚挙を日本人の生み出す場の空気論で説明している。「統計も資料も分析も、またそれに類する科学的手段や論理的論証も、一切は無駄であって、そういうものをいかに精微に組みたてておいても、いざというときは、それらが一切消しとんで、すべてが「空気」によって決定されることになるかも知れぬ(日本の文化)」と警告する<sup>(21)</sup><sup>(22)</sup>。

日本人の歴史を綿密な調査により人間の視点で捉え続けた歴史小説家司馬遼太郎も、「日本の地理的・地勢的特殊性が他の欧米社会と、そして他のアジア地域とも異なる独特の文化を創成したと認識し、集団では愚挙を犯す可能性のある日本人の特性に対し、危険信号を送っていた。律令国家時代にお上と農奴という奴隷の関係が構築され、それ以降、公と私との関係が不明確なまま(個としての自立がないまま)、戦国時代に合理主義の育つ機会があったものの、明治には天皇を頂点とする復古的なピラミッド型奴隷制度に逆戻りした」と指摘する。そして「国家が必要悪として常にその存在理由を問われる欧米文化の伝統<sup>(23)</sup>」に対し、民は従順で税金は払い続けなければならないとする固定観念が鎮座し国家というものが疑問を差し挟む余地のない存在であるとする社会とは好対照である」とする。また、「日本人は、欧米のように、一神教で絶対とすべきものを持ち、それに対し

て個人が対峙する構造にはなく<sup>(24)</sup>、常に相対的で直属の上司（上の存在）との狭い関係性が優先する（犬的忠義の世界）。現象面では、小集団の分離という形の裏切りが頻発する構造を内在させている（日本の国内戦役は戦略ではなく人間関係学の中で形成される裏切りで決着）。国の指導的立場にあるお上は、弥生式の農耕意識（米穀経済的なものの考え方）から解放されず、実社会に対する感性が鈍く（リアリズムがない）、貨幣経済・商品経済的論理（貨幣による価値の決定方式）が劣後（蔑視）されるため、総じて合理主義が育たない風土を醸成している」と指摘。「弥生時代の純農地帯から来た高等文官では、貨幣経済を理解できないから合理主義も生まれぬ。彼らは異常な愛国心で出世する。彼らが大東亜戦争を起こした」と断じている<sup>(25)</sup>。もちろん、日本人すべてがそうではない。例外として、漁民や東北に見られた狩猟を業とする民（マタギ）や網野善彦が好きな悪党や白拍子に象徴される土地に縛りつけられない人々やアジアを戦慄させた倭寇（但し領土的にも経営的にも（トップ＝経営者には中国人を仰ぐ）無欲なやくざ集団）、そして、大阪商人や貿易に注力した足利義満や商品経済に理解を示した側用人田沼意次など、合理性を理解できる人たちはいた。しかし、日本社会全体を覆うイデオロギー（タテマエとしての米本位制）としては、情から離れる合理性は尊敬されず、むしろ彼らは蔑視され賤民や悪人として歴史に名をとどめることになる。明治維新に活躍した長州藩も薩摩藩も実は貨幣経済に目覚め合理的精神を培い資本を飛躍的に蓄積（欧米的近代化）したので雄藩となった。下級武士・農民までも問題意識が高かった。そのイデオロギーが自立的人材の輩出につながり、藩を富まし、他藩とは比較にならない戦闘能力の高い藩民皆兵を実現したとしている。しかし、これらは歴史の例外であり一瞬であるからこそ成功したのである<sup>(26)</sup>。

堺屋太一は、「日本は、大陸と近からず（国

防的優位性）遠からぬ（文化の透過性）、世界にまれなる特異な亜大陸にある。その絶妙の位置関係が、国防という外向きな大規模な非常事態に備える必然性に薄く、勢力をひたすら内向きに村落共同体に傾注することを可能とし、和の伝統を育んだ。遠からぬ中国・韓国からは技術や文化を選択的かつ表面的に取り入れ、本物を越えるものを生み出す能力を発揮した（大仏の銅の溶着術、鉄砲の精度、戦後の製造技術など）。さらに特徴的なことには、天皇を頂点に据える神道を否定することなく仏教と儒教とを融合させるという画期的な宗教改革が、古代において、天才聖徳太子により創りあげられた（神仏儒習合<sup>(27)</sup>）。その伝統を引き継ぎ、宗教間の対立や思想的確執による血みどろの争いのない歴史を歩んでいる」とする。そして、「思想性に乏しく、それゆえに何事に対しても表面的適応力が極めて高い。国家意識に薄く、従順であることを規範として「お上」を信頼するという構図を疑問視しない。さらに特異なのは、絶対正義が存在せず、正義はそのときその場できまる、みんなの意見が正義となるような、相対正義<sup>(28)</sup>の概念を構築して今日に至っている」と指摘。また「個人は、いくつかの組織に帰属するが、集団主義的で、その組織は相互に独立するのではなく個人を取り囲むように同心円的に形成され、その集団の排他性は極めて高い。また組織は、個人に対する拘束性が強く、強いリーダーを求めず、個人は集団の中で個性を奪われ、従順・忠実を旨とする儒教的教育に懐柔され没自我的症状をきたす」と警告している。さらに、戦後についてみると、日本は確かに国家としては工業化社会の優等生（世界一の最適システムの完成）、世界に冠たる製造業大国となったものの、最終的には日本という国柄は欧米からは蔑視の対象となった。個人はエコノミックアニマル、国家は工業モノカルチャー、顔の見えない経済大国と揶揄されたのである。日本の国力急膨張に対して80年代に始まった日本たたき（Japan-Bashing）は、競争力の衰弱にともない



日本無視 (Japan-Passing, Japan-Nothing) と呼ばれ久しい。その後のグローバリゼーション・IT革命の歴史のうねりを考えれば、今後日本が世界において存在感を残すには、頑迷古老年なドイツがアングロ化に路線に変更した如く、従来の脱亜入欧、今様に言えばアングロ化路線を表面的でなく文化革命を行ってでも断行する覚悟が求められているように思える。それができないときは、堺屋のいうように日本は日本の伝統文化を保守し第五の文化圏として生きていくとして、世界に向けて宣言しなければ誤解され続けることになる。「文明開化」にひた走り、「八紘一宇」で辛酸をなめ、「GNP大国」で過労死も厭わず、日本の伝統的やり方 (文化) で本質を見極めず巧みに形 (いいとこどり) だけを糊塗して生き延びてきた利口もの、日本は、今その「つけ」を精算する時期にきているのである<sup>(29)</sup>。

#### (v) 民俗学的視点から捉えた日本人像— 「べしみ」「もどき」という日本人に固着するニヒリズム—

そして、極めつきは日本人のべしみ・もどき論である。無表情に個を表に出さない。とりわけ上下の関係になっている場合にその傾向が強い。そのような日本人について、評論家加藤典洋が日本の民俗学からひとつの解をみいだしている。彼は、日本人が見せるホンネとタテマエの二面性、そしてそれが状況如何で入れ替わり結局はどちらでも良いとするニヒリズムに日本人の特性を発見する。形ある人間ながら、その背後に潜み表に出ない日本人の個の構造に注目する。

堺屋太一と同様に、彼は、日本人は、歴史に繰り返される圧倒的に優れた文化圏に遭遇する度に同質性を保ちつつ生きながらえるために、ひれ伏し全面屈服することを強いられたと主張する。大きい物に巻かれる、巨大な文明には決して歯向かわない (唯一の例外が大東亜戦争)。卑屈な日本人像がそこにある。幸か不幸か、日

本人は、巨大文明に接しながらも巧みに恭順の意を表すことにより、地勢的に民族大移動が起こるような・他民族と混ざり合うような・民族が全滅するようなクライシスには巻き込まれなかった。自ら発言することを好まない、自己主張しない、イエスカノーかわからない。このような日本人の特性を彼はこの歴史の特殊性から説明できるとするのである。絶対的な文明と彼我との巨大な差に比べれば、その勢力に取り入った中央の権力者と地方の従者との差は無いに等しい。少しのきっかけでそれは逆転する。ホンネを隠しながらタテマエで権力を握る中央の役人と、それを承知で従うしかない地方の民。彼は、「日本では、優者の経験よりも劣者の経験の方が深い。中央の役人に代表される優者の経験はつねに相対的で劣位経験を隠したものでしかない。それに比べて地方の人に代表される劣者の経験は相対的なものであると同時に絶対的なものに開かれている<sup>(30)</sup>」と述べ、日本民族という同質性の中に、複雑で時に魍魎魍魎たる二重構造が存在すると指摘する。彼は多田道太郎の言葉を引いて「べしみは口をぎゅっとつぐみ、眉をしかめ、断じてものは言わぬという表情をしている。べしみは唾に通じるので何を言われても返事はしないという精神の表現である。責任という言葉があるが責任とはレスポンドすることである。問いに対してまともに答えることである。しかし、権威と圧力が支配している世の中で、まともに答えることは圧力に服することにつながっていく。昔の征服され圧服された神々は、一切新しい神の威力にとりあわぬことにした。それがべしみの起源である<sup>(31)</sup>」と日本人「べしみ」論を展開する。

さらに、口答えをしない我が日本民族の特徴を民俗学者折口信夫の古代芸能史の「しじまの記憶」から説明を試みている。「我が国の文学芸術は、最初神と精霊の対立から出発した。神は精霊に問いかけた。神の威力ある語が精霊を圧服することを信じたからである。だが精霊はくいとめる手段は神の語に取り合わぬことであ

る。……しじまをまもり続ける以外には神の威力を逸らす方法がなかった。<sup>(32)</sup>」

そして、彼は同じく日本芸能に見られる物まね・とぼけ、つまり「もどき」に、絶対優位者に対する屈従的抵抗をみつけている。「物まねとは模倣だが、模倣対象への信従の表現でありながら、また、その模倣される対象の一つしかない神聖性への侵犯でもある<sup>(33)</sup>。」と述べ、そこにあるのは言葉を奪われたものの勇気であると評価するのである。

べしみやもどきが日本人に固着した剥がすことのできないものであるとすれば、それは、現代の日本人もまた欧米文化を本質的なところで会得・吸収することが不可能であることを意味する。卑屈な劣等感を秘めた、どうでもよいとする、このニヒリズムを越える決意が無い限り、我々には自由も民主主義も理解できない。昨今もてはやされる、コミュニケーション、アサーション、ファシリテーションなどの個を表に出し、人との関係性を向上させるスキルや、ひたすら相手に話させることを主眼においたカウンセリングやコーチングなどの導入も、日本人の心の底に流れるべしみ文化の前では、小手先のまやかしに過ぎないことになる。ビジネスとしては存在しえても、また、時の権力者たる官僚には利用価値があるが、根本的に日本人を変える力にはならない。米国文化に衣替えできた日系人のように、日本人が引きずってきた伝統・文化・慣習の総入れ替え・文字通り洗い替えしないといけないのだろうか。べしみ文化を内包する日本の集団主義も根深いものがある。我々は、長い歴史に積み重ねられたニヒリズムのDNAを変えられるだろうか。

### (3) 経済学者が海外から見た日本と日本人（「上からの資本主義」から、自立した個人による「下からの資本主義」への脱皮は可能か）

ロンドン大学で長きに亘り教鞭をとり、日本と

アングロサクソンの世界をよく理解する世界的経済学者森嶋通夫は、歴史学・宗教社会学・教育社会学・その他の学問領域を分析用具としてより広範な経済学の視点から、日本を分析する。彼の分析視点はマルキストのような唯物論ではなくむしろ住民のエトスを問題にする。日本は、忠君愛国を正当化する原理となった日本的儒教（中国のそれとは相違）のエトスによって、「上からの資本主義」<sup>(34)</sup>、国家主導の資本主義と言い換えてもよいが、の優等生になった。しかしながら、英国のように成功した先進的資本主義国家として当然のこととしてありうべき、次のステージ「下からの資本主義」への転換が幾たびかの歴史的機会<sup>(35)</sup>がありながら、実現していない、と指摘。このような現下の日本社会、日本国民に対し強い懸念を（90年代初めより）示していた。

「下からの資本主義」を正当化するには、本来は米国的個人主義と自由主義が貫徹されることが理想であるが、日本ではそれは困難であるので、他人との関係に於いて自分自身の良心に対する誠実を重んじ嘘をつかないことを主要徳目とする中国式儒教<sup>(36)</sup>が適している。また下からの資本主義とは国家の意思ではなくて市場の法則<sup>(37)</sup>がすべてを決めるシステムである。「下からの資本主義」を律するにはその経済における各人が自立し対等でなければならず、そのためには意志決定に際して個々人が独立した自由意志により意思表示が行われる、民主主義が成立していなければならない。そして、市場参加者にとって大きな政治問題が、議会政治が機能して解決されなければならない、とする。

また、日本経済は戦前の体制（上からの資本主義システム）が温存され、つまりメインバンク・総合商社・系列・株の相互持ち合いによる安定株主制度など、官僚主導によるタテの大組織群が、戦後の経済復興には結果的に<sup>(38)</sup>功を奏した。「上からの資本主義」とは国家の指示をうける部門と受けない部門での格差が生じる、公平性を欠くことが前提のシステムである、と述べている。日本経済は成熟し、さらにバブルの時代を経て、官僚

(上からの)の力が弱まり、金融の銀行による一元的支配(間接金融)も崩壊し、BIGBANGなどの規制の緩和も進んでいる<sup>(39)</sup>。なお、キャリアデザイン的に説明すると、賃金の二重構造を生み出す終身雇用制度は、労働市場を新卒などの市場の形成にとどめ、キャリアデザインを組織を越えて自由に構築できるような市場(セイフティネットの設計)は、未整備のまま現在に至っている。

なお、森嶋は教育に関しても、「日本のティーンエイジャーの強い性欲と物欲に懸念を示し、これらの欲の比重がバランスを失って大きくなれば、近代資本主義の原理にふさわしい健全な労働倫理を未来の国民が持つことはまずありえない。競争経済の労働倫理は具体的な雇用主や会社に対する忠誠心を強要するようなものではなく、労働者が尊重し従うべき忠誠心は、もっと抽象的なものである。抽象的で超越的なものに対する義務感や責任感を持たせるためには現代日本の教育環境はあまりにも物質主義的で標的外れで不毛である。宗教的な環境(高次元の倫理への畏れ、抽象的なプリンシプルに対する畏怖心)は一切見られないからだ。家庭でも学校でも、真剣な議論が行なわれることはない。倫理上の価値や理想、また社会的な義務について、何の興味も持たないのである。そして、例えば「愛」を語ることを知らない」と国の未来を憂いている<sup>(40)</sup>。

#### (4) 21世紀に向けた日本の構造改革と個の自立に向けた動き(現在の知識人の見解)

日本が衰退を始めた90年代後半以降、多くの人たちが日本はこれでよいのだろうか、構造的な問題が潜んでいるのではないかと、危機意識を強く持った。そのような中で、政界を含め良識ある人たちが、日本変革に向けた議論を行い、いくつかの報告書が提出されている。小泉構造改革はその流れを政策として実行に移そうとしたものである。そこでは、形だけでなく日本人の心の姿勢・個の自立問題にまで言及しているものがある。その報告書二つを紹介する。ひとつは、故小淵首相

が音頭をとった、21世紀日本の構想懇談会報告書(2000年1月発表、既述の心理学者河合隼雄が会長)であり、もう一つは、日本の骨格を根こそぎ変えようとする、司法制度改革審議会意見書(2001年6月発表)である。また、これらを受けて、新教育基本法(2006年制定)に向けた中央教育審議会(2003年3月)の答申も発表されているので参考までに概観する。

#### ①21世紀日本の構想懇談会報告書

この報告書は、「日本のフロンティアは日本の中にある—自立と協治で築く新世紀—」というビジョンを打ち出し、「国民が国家と関わる方法とシステムを変えること」、そして、「市民社会における個と公の関係を再定義すること」の二つを最優先課題として高らかに謳いあげている。その基本にあるのは、日本人個人のありようである。個の自立に基づき新しい「公」の形成を図ることの重要性を訴えている。報告書には、「それには、まず個を確立することである。自由で自立し責任感あるしっかりとした個であり他者を人間的共感によって包容する広がりのある個を解き放つ。そうしたたくましく、しなやかな個が自らの意志で公的な場に参画しそれを押し広げることで躍進的な公を作り上げていく。……………そうしてこそ、より果敢にリスクをとり、先駆的な挑戦に挑み、より創造的で、想像力のある、多様で活力のある個人と社会も登場する。……………」とある。

これまで個の自立の問題は、言葉としては何度も繰り返されてきたが、お題目に過ぎず平等を唱えながら、どうゆうわけか常に暗に従わざるをえないような存在(偉いさん)がいた。つまり、序列を形成しその中で個が埋没する伝統的な日本的集団主義の構図の中で、欧米的な自由や平等は、事実上かき消されてきた。今回の報告書では、個をベースとして、個の自主性により、個自らが参加し関与し決定し、そして決めたことは遵守するような「公」を形成すること、つまり「お上」の概念を払拭しようとするもので、実現すれば、それは、日本の歴史・文化の舵を大きく切るような

大宣言である。それは実現しなければいけないし、実現できなければ、欧米諸国はもちろん、グローバル化の中でエリート層を中心にして欧米化しつつある諸国からも取り残されることになる。この大宣言が人口に膾炙して、ようやく、日本人は、人間についての基本的考え方、そして人間と公との関係性に関わる基本的考え方に於いて、二百数十年前の米国の独立宣言とそれに続く人権宣言に並ぶこととなる。

キャリアとの関わりでは、この報告書には、キャリアデザインする場合の前提となる個の問題に加え、「生涯を設計する」というテーマで、ライフスタイルの自由な選択と自己実現の重要性や生涯学習の必要性が指摘されている。また教育に関しても①人間として生きるために不可欠な約束事、②社会人として生きるための基礎知識③職業人として必要な基礎知識と技能を育てることを基本に体系化すべきと提言されている。

## ②司法改革

司法制度改革は、21世紀日本が世界で相応のポジションを維持するための、政治・経済・社会の各分野の構造改革を進めていく上で、不可欠のものであり、国家戦略の中核に位置づけるべき重要課題である。今回の審議会意見書は、国家百年の計として「21世紀の日本を支える司法制度」を副題とし、これまでの統治の哲学を180度転換するものである。個の自立と賢明なる個々人が社会の基盤となることを大前提として構成されていることを肝に銘ずるべきだ。そこでは、「(i) 国民は……自律的かつ社会的責任を負った主体として……自由かつ創造的な社会を築き…… (ii) ……国民の統治客体から統治主体意識への転換を基底的前提とする……国民自らが統治に重い責任を負い……そういう政府への転換である。…… (iii) ……国民の自由かつ創造的な活動が期待され……個人や企業は、より主体的に社会経済的生活関係を形成する…… (vi) ……我々が……国際社会に向かってどのような価値体系を発信できるか、……自由かつ公正な国際社会の形成に向けて我々がいかに積極的に寄

与するかという希求に……」など 随所に個についての記述がある。個の意識革命の喫緊性を訴え、個としての政治的自立を強く要請している。真に自立する個としての国民の基盤がなければ21世紀の日本社会は描けないのである。以下意見書の第一章「21世紀の我が国社会の姿」総論部分の一部を紹介する。

「国民は、重要な国家機能を有効に遂行するにふさわしい簡素・効率的・透明な政府を実現する中で、自律的かつ社会的責任を負った主体として互いに協力しながら自由かつ公正な社会を築き、それを基盤として国際社会の発展に貢献する。

我が国が取り組んできた政治改革、行政改革、地方分権推進、規制緩和等の経済構造改革等の諸改革は、何を企図したものであろうか。それらは、過度の事前規制・調整型社会から事後監視・救済型社会への転換を図り、地方分権を推進する中で、肥大化した行政システムを改め、政治部門（国会、内閣）の統治能力の質（戦略性、総合性、機動性）の向上を目指そうとするものであろう。行政情報の公開と国民への説明責任（アカウンタビリティ）の徹底、政策評価機能の向上などを図り、透明な行政を実現しようとする試みも、既に現実化しつつある。

このような諸改革は、国民の統治客体意識から統治主体意識への転換を基底的前提とするとともに、そうした転換を促そうとするものである。統治者（お上）としての政府観から脱して、国民自らが統治に重い責任を負い、そうした国民に応える政府への転換である。こうした社会構造の転換と同時に、複雑高度化、多様化、国際化等がより一層進展するなど、内外にわたる社会情勢も刻一刻と変容を遂げつつある。このような社会にあっては、国民の自由かつ創造的な活動が期待され、個人や企業等は、より主体的・積極的にその社会経済的生活関係を形成することになるであろう。

21世紀にあっては、社会のあらゆる分野において、国境の内と外との結び付きが強まっていくことになろう。驚異的な情報通信技術の革新等によって加速度的にグローバル化が進展し、主権国家

の「垣根」が低くなる中で、我が国が的確かつ機敏な統治能力を発揮しつつ、「国際社会において、名誉ある地位」（憲法前文）を占めるのに必要な行動の在り方が不断に問われることになる。我が国を見つめる国際社会の眼が一層厳しくなっていくであろう中で、我が国がこの課題に答えていくことができるかどうかは、我々がどのような統治能力を備えた政府を持てるかだけでなく、我々の住む社会がどれだけ独創性と活力に充ち、国際社会に向かってどのような価値体系を発信できるかにかかっている。国際社会は、決して所与の秩序ではない。既に触れた一連の諸改革は、ひとり国内的課題に関わるだけでなく、多様な価値観を持つ人々が有意的に共生することのできる自由かつ公正な国際社会の形成に向けて我々がいかにか積極的に寄与するかという希求にも関わっている。

このようにして21世紀において我々が築き上げようとするもの、それは、個人の尊重を基礎に独創性と活力に充ち、国際社会の発展に寄与する、開かれた社会である。」

### ③新教育基本法

そして、新教育基本法に向けた中央教育審議会の答申（2003年3月）でも、その2章で「21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成」を目指すための五つの目標を掲げている<sup>(41)</sup>（注 教育基本法）。その第一は、自己実現を目指す自立した人間の育成をあげている。すなわち、「すべての国民は、一人の人間としてかけがえない存在であり、自由には規律と責任が伴うこと、個と公のバランスが重要であることの自覚の下に、自立した存在として生涯にわたって成長を続けるとともに、その価値が尊重されなければならない。個人の能力を最大限に引き出すことは、教育の大切な使命である。一人一人が学ぶことの楽しさを知り、基礎的・基本的な知識、技能や学ぶ意欲を身に付け、生涯にわたって自ら学び、自らの能力を高め、自己実現を目指そうとする意欲、態度や自発的精神を育成することが大切である」としている。

ちなみに、第二は、豊かな心と健やかな体を備

えた人間の育成、第三は「知」の世紀をリードする創造性に富んだ人間の育成、第四は新しい「公共」を創造し、21世紀の国家・社会の形成に主体的に参画する日本人の育成（個人の主体的な意思により……………自発的な活動への参加意識を高めつつ、自らが国づくり、社会づくりの主体であるという自覚と行動力……………）、そして最後に、日本の伝統・文化を基盤として国際社会を生きる教養ある日本人の育成をあげている。

## Ⅳ（キャリアデザインの時代） 中間まとめ

自由の国、米国という社会が変化する中で、彼らアングロサクソン文化を背景にしてキャリアという概念が生まれ育まれた。その研究を日本で行う場合、現代という時代を捉える歴史認識や日本人という特異な文化を共有する民族的特徴に係わる研究はさけては通れない。またキャリアデザイン学として体系化するには、これらの点を踏まえた個の認識の仕方についても固める必要があるだろう。個の認識を行う場合、欧米流の心理学や社会学で行われる考え方や手法を取り入れることについては否定しない。しかし、心の奥に横たわる日本的特質から目をそらすことはできないのではないか。

日本人という人種固有の特質を踏まえた、個の認識の仕方や個と今の時代との関係を理解することが重要だ。日本人という深い谷を越えてはじめて、我々日本人にとってのキャリアデザインの意味が自覚できるし、日本人の生き方としてのキャリアデザインの緊要性を悟ることができるのではないかと考える。

これまでの議論をまとめると、今後の私にとってのテーマも含めることになるので恐縮であるが、次のとおりである。

1. 現代日本は経済社会の枠組みとしては米国的キャリア社会に突入しつつある。しかしながら、そのインフラ、市場化の歩みやセイフティネットの整備は十分ではない。

2. 我々はキャリアデザインを語るべきポストインダストリーのまっただ中にある。人は産業時代の大企業の歯車的存在から、人と人との関係性や知識そのものから価値を創造する、自立的で自由な存在になってきている。

3. 欧米諸国は宗教革命・啓蒙主義の時代を経て、自由度が著しく制約されていた中世のコミュニティ社会から個が解放された。孤独な個は強くならざるをえず、近代合理主義の旗の下で自立する。心の近代化が図られたのである。我が国は、欧米列強に伍すべく殖産興業に励み経済大国となるが、個の近代化は遅々として進まなかった。欧米では既に近代合理主義に対して反旗を翻し、ポストモダンの狼煙を上げるが、我が国教育界での問題意識は低いように感じられる。日本人は、心の近代化の問題を未消化のまま、欧米のポストモダンの議論に飲み込まれようとしている。

4. 日本人は、個の自立の概念について議論を尽くしていないように思われる。その重要性につき十分な社会的コンセンサスを形成することなく、言い換えれば日本人の心はプレモダンのまま欧米流のポストモダンの時代に迷い込んだようだ。東京一極集中により地域コミュニティが崩壊し、終身雇用という会社コミュニティも崩壊し始め、社会の枠組みが外から崩れ落ちる時の流れの中で、日本人の心は呆然としてさまよい始めたと言っても良い。加藤智大のアキバ無差別殺傷事件に見られる如く、コミュニティからはぐれた、自立しえない若者の心は液状化しつつある（鈴木謙介）。個が浮遊し始めている。個は自立してみずからキャリアを考えざる（デザインせざるを）をえない時代になったのである。

5. 日本は集団の歴史から個を軸とする歴史を描く時代に足を踏み入れたのだと思う。個にとっては極めて重大な時期にいる。その自覚が重要だ。資本主義という大きな社会の枠組みでの生活、つまりは社会の一員として職を得て働くことを一方で強要され、他方で個を中心とする人間的生活への再編成の中に安堵を見いださざるえない時期にいるのである。現代日本の個は、冷徹な資本主義

社会との関係性の中で生きて行かなければならないとすれば、自らの意志で自分にとっての良いキャリアの選択の意味を自覚し渴望することに救いがあるのかもしれない。各人が良いキャリアとは何かを求め、思い描き、悩み、そして心を決める。このプロセスを繰り返すことは社会における自分の役割を自覚することにつながる。良いキャリアを求めることが自己の改革につながり、個々人の自己改革の集積がよい社会への変革に発展するのではないかと考えている。個において、このような自覚をもたせる教育が喫緊の課題である。

6. 近代の個が企業家や大企業のサラリーマンという枠組みの中で生きており、それが、ロバート・ベラーがいうセラピーの関係（近からず遠からずの独特の距離感の組み合わせ）を求め<sup>(42)</sup>、そして、米国においてそのような人間をケアするセラピストが適度な人間関係性の誘導を行い組織の効率をあげ職種的にも市場化されているのであれば<sup>(43)</sup>、キャリアデザイン学部的には、そのようなセラピストの存在を認識し研究の対象すべきなのであろう。

7. 米国社会が80年代の大不況時に教育の原点に立ち戻りリベラルエディケーションの議論（キャリアの重要性についても言及）を行ったように、我々も、産業が主役の時代から個が主役となるパラダイムシフトを実現し、個を中心にしてまわる社会への転換を図らなければいけない。

8. 日本の知識人は、河合隼雄を始めとして、個の自立性に関し彼我との相違については痛いほど認識している。しかし、その事実をどのように啓蒙しどのように教育のプロセスにのせるかについては答えを出していないのではないか。キャリア教育にも係るキャリアデザイン学部の責任は大きいのではないだろうか。

——— 注 ———

(1) 『人間を幸福にしない日本というシステム』 カルフ・ヴァン・ウォルフレン 毎日新聞社 1994 p 326

(2) (渋沢栄一) 日本で資本主義を実行に移した経営

者、渋沢栄一が残すビジネス訓「夢七訓」は次の通り。新しい時代を切り開く人物の熱く清新な心が伝わってくる。①夢なき者は理想なし②理想なき者は信念なし③信念なき者は計画なし④計画なき者は実行なし⑤実行なき者は成果なし⑥成果なき者は幸福なし⑦ゆえに幸福を求める者は夢なかるべからず。

(福沢諭吉) 西洋事情、学問のすすめ、文明の概略などが多数の著作を発表した明治の開明思想家である。彼のおさだめという戒めをベースに、後生成された福沢心訓が世上流布されている。仕事についての戒めであり、よくできているので紹介する。①世の中で一番楽しく立派なことは、一生を貫く仕事を持つことである②世の中で一番みじめなことは、人間として教養のないことである③世の中で一番淋しいことは、する仕事のないことである④世の中で一番みにくいことは、他人の生活をうらやむことである⑤世の中で一番尊いことは、人のために奉仕して決して恩にきせないことである⑥世の中で一番美しいことは、すべてのものに愛情を持つことである⑦世の中で一番悲しいことは、うそをつくことである。

(後藤新平) 後藤新平は、官僚として自治、自立をとき、東京市長として関東大震災の直前にまちづくり大改造を断行・現在の東京の基幹をつくった。公たるものの意味をよく理解し、「権力が私されるところに未来はない」という名言も吐いている。

(市井の道場訓) なお、市井で流布している道場訓を紹介したい。「はい」と言う素直な心、「すいません」という反省の心、「おかげさま」という謙虚な心、「私が出ます」という奉仕の心、「ありがとう」という感謝の心。プロテスタンティズムと通ずるところがあると感じている。

(3) 『大塚久雄全集』 第八巻 p178

(4) 『現代政治の思想と行動・増補版』(丸山真男 1964 未来社 p25) をベースとして『日本の個人主義』(小田中直樹 ちくま新書 2006、p36~39) を要約した。丸山は、日本には主体的な支配者はいない。天皇でさえ「天皇は万世一系の皇統を承け、皇祖皇宗の遺訓によって統治する」(現代政治の思想と行動・増補版 1964 未来社27頁) であり、伝統に由来する権威や権力にまもられていたに過ぎない。

い。日本人には「自由なる主体的意識」はなく、その意味で終戦は重要な意味をもち、事実、丸山の説が知識層に大きな反響をよび、自由や個人の自立についての認識は高まった。現在は、なおその延長にあるが、日本の風土はさほど改善されていないように思える。

(5) (川島武宣)

川島は、著作『日本社会の家族的構成』(1948) に於いて、日本は「民主化」が行われておらず、社会・政治・文化の各領域における革命が必要であり、そのための我々日本人個人の仮借なき反省と批判が必須であると断じている。我が国の家族制度を、封建武士的=儒教的な家族制度と庶民家族に分類し、「前者は、貴族・大地主・大町人・封建的な士族層のそれであり、「権威」と「恭順」を基本原理としていること、「恭順」は「服従者は抗しがたいものとしてこれを意識し、むしろすすんでこれに服従する」、人間精神を「外から」規定する権威への服従にすぎず、自らの内面的な命令に媒介された自発的服従ではない。後者は農民家族が典型であるが、秩序の源泉は「横の」協同関係であり、集団の「あたたかな人情的情緒的雰囲気」が支配している。従ってここでも「独立の個人としての自分」を意識することは不可能である」としている。そしてそれら家族制度を基盤とする日本社会の特徴を、(i) 権威による支配と権威への無条件服従 (ii) 個人的行動の欠如と、それに由来するところの個人的責任感の欠如 (iii) 一切の自主的な批判・反省を許さぬという社会規範 (iv) 親分子分的結合の家族的雰囲気と、その外に対する敵対的意識との対立、つまり「セクショナリズム」として現れる、と述べている。(出所；川島の『日本人の法意識』岩波新書及び『戦後思想の名著50』岩崎稔他編 平凡社2006/2 p66~68を参考にまとめた)

(6) 『タテ社会の力学』中根千枝 講談社現代新書 1978 p20、p82

(7) 『タテ社会の人間関係』(中根千枝 講談社現代新書 1967 p145) を参考にまとめている。

(8) 人口一億を超える中央集権化された先進国は日本以外には存在しない。米国は三億の大国である

が、連邦国家であり50州各州が独立した憲法・法体系をもち、外交上の条約で加入している州もある。欧州諸国は基本的に人口一億に満たない。その中で大国であるドイツは連邦国家で地域の力が強い。イギリスも連邦国家でさらなる分権化を進めている。イタリアは、カンパリスモ（郷土思想）にみられるごとく地域コミュニティの強い国柄であるが、戦後社会主義国と隣接するNATOの拠点として集権的政治が実行され分権化が見送られたが、20年後州制度に移行、中央官僚の多くが地方に下った。フランスは集権国家であるが、80年代から分権的法制度が整備されつつあるといわれている。

(9)『タテ社会の人間関係』中根千枝 講談社現代新書 1967 p188

(10)『タテ社会の力学』中根千枝 講談社現代新書 1978 p157

(11) (中根千枝) 中根の説をさらに説明すれば、次の通り。

① この小集団を基本とする社会は、産業システム的には、目標や目的とするものが確定され、それに向けて邁進する、「追いつけ追い越せ型」の時代には大成功を収めた。製造業システムとしては完璧で従業員間で切磋琢磨が行われ、技術の改善・改良が図られ、大規模生産にも系列的組織構造（複数のワンセット型組織構成）で対応し、1980年代日本を世界のトップの座に躍進させた。中根のこトバをかえると、「みんな同じことをしないとがすまない。競争に負けてはならない、バスにのりおくれたくない」という風土を生み出し、経済学的には分業の精神がなく資源の最適配分が行われにくい、非効率な経済システムになる可能性もある。

一方、脱工業化社会にはいり、試行錯誤的技術開発による価値創出が必要な場合には、横的な調整が必要なアライアンス（タテ組織は呑流的統合や系列下には適するが）はなじまず、能力ある者をリーダーとして組織的に対応する動きには不向きである。また、外からアライアンスなどが求められた場合でも排他性が強く、なじみにくい。

行動の決定はリーダーの直属幹部の力関係、リーダーとの人間関係に左右される（『タテ社会の力学』中

根千枝 講談社現代新書 1978、p141）。リーダーの権限も自由度も欧米とは異なり小さく幹部に引きずられる。ワンマンは幹部との相対関係が圧倒的にリーダーが強い場合のみであり、側近やとりまきが巣くう土壌もここにある（同p89 p90）。上に立つ者は天才でない方がよく、頭が切れすぎたり器用な人は敬遠される（同p148）。重要なのは人間に対する理解力や包容力が日本的リーダー資格となる。結果、リーダーは年長者となりがちで老人天国を作り上げる（同p148）。さらに、組織論的には、熟成した集団の組織の力は強力で、組織の変更は集団の崩壊なしにはほとんど不可能といえる。頂点にいないと個人はリーダーになれない。有能な若者にはつらく、変化の激しい社会には極めて遺憾なメカニズムと言わざるをえない（同p152）。

人間関係的には、リーダーが部下に自由を与えうる社会、序列をまもり人間関係をうまく立ちまわれれば、能力に応じてどんなにも羽を伸ばせるし、なまけようと思えば怠けられる構造であり（同p153）、リーダーの主たる任務は和の維持で、うるわしい（日本的な）積極性でリーダーを支え「かわいいやつ」と思い遣りをもらうことが昇進の可能性を高める（同p162）。

集団の運命は、「感情的人間関係を前提とする相対性原理が強い（同p173）」人間関係性自体に委ねられることになり、客観的論理的判断が必要とされる変化へ激しい時代には的確で適時の判断を誤る可能性がある。

小集団的発想は、批判をゆるさない体質や序列（実力より肩書き）を重んずる構造を生み出し（同p174）、堂々と論理的に反論できない仕組みや最後まで平行線の議論、そして不必要な賛美の強制につながり、物事に対する「なまぬるさ」に安住しがちとなる。さらに、会話は上位者が常に主役となり、「話を聞く・話をする」の一方通行が多く、「会話を楽しむ」ことにはならない。真の「対話」が成立しない社会である（同p177）。（《気のあった仲間同士は弾む＝リラクゼーション》。論理よりも感情を楽しむ（同p181）、論理のない世界に遊ぶ（同p183）、外人に理解できない社会である。



② 個を意味するIndividualは、それ以上分けられない（不可分の個体）という意味である。欧米の近代の歴史は、尊厳ある個に立脚し、個の自由や権利の獲得の闘争であったといえる。しかしながら、日本は、夫婦は一体とされ、財産もイエとして誰が継承するのかという点が重要であったように、小集団に重きがおかれる社会であった（小集団たるイエや組織が巨大化する時には分家・暖簾分け・定年退職などの仕組みを作り上げていた）。日本のような小集団への強い帰属意識のある社会では大集団の成員権は、個人の属性で成員権をえるものではなく（同p41）、その部分である小集団の成員としての資格での加入となる。大集団でも派閥や仲良しクラブが形成されるなど、「セクショナリズムの傾向が強い」（同p37）。欧米が個人を基本とする社会とすれば、日本は小集団を不可分な（individual）基本とする社会と認識すべきかもしれない。「全員の賛同を得た」とか「満場一致」は意見が違うにも拘わらず全員がその決定に従わざるを得ないという意味で用いられ、欧米社会の全員一致（unanimous consensus、つまりagree）という意味とは異なる。一寸先は闇とか潮時という言葉があるのは、このような合意があるが本当の合意ができていないプロセスの反映である（同p128）。真の服従という意味では小集団の成員は、社会の厳格なルールを絶対視する欧米に比べ、服従力はむしろ弱いと言うべきかもしれない（同p92）。

(12) 河合隼雄『日本人と日本社会の行方』（岩波書店2002/2 p63～、p91～）を参考に構成した。

（河合隼雄）河合は、日本では、母性原理に基づく絶対平等が強調され、それを以て革新とする人たちが多く、彼らは極めて古い日本の人間関係を重視しているため、「民主主義」と言っても、個人主義から出発した欧米的民主主義を理解できず、全く異なる日本的民主主義を作り上げてしまったと、彼らを批判している。

なお、河合は母性原理社会の教育についても、次のような特徴をあげている、参考になるので紹介する（一部修正）。「母性社会は、教育の分野でも特徴的な現象を見ることができる。人間の能力差を前提

とする考え方を嫌う。すべては同等、あるいは平等なので、勉強の出来ないということは「怠けている」、「努力が足りない（努力すれば絶対に一番になれる）」ということになり、あらぬ強い圧力が子供にかかる。集団の秩序のための序列は「長幼の序」という所与の要件によっていた。しかも、その順位は極めて厳しい。欧米の影響を受け試験を導入したが、その場合も、個性は無視して、偏差値という序列に金科玉条のごとく固執する。しかも、このようなプレッシャーが強いことに対しては、日本は「競争社会」だからいけないなどと言う話になる。競争とは、フェアに競い合い、高めあうことであり、争い蹴落とすことではない。人間の尊厳を重視し、個性という能力を重視する欧米とは決定的に異なる。欧米的には、無意味な、差をつけることだけが目的の競争が行われることになる。これに教育ママが拍車をかける。我が子を成績の「よい子」にするだけにエネルギーが向けられ、忠実・従順な、母性社会のなかで磨擦を起さず「平和」に生きる子が生み出される。これからの時代が求める個性という観点からすれば、逆行する、まったく魅力のない人間を生み出すことになる。子どもにとって貴重な時間帯である幼少・青年期に日本の教育がマイナスに作用しかねない。教育の本来の目的である、尊厳ある人間として人間同士尊敬し合いながら「生きる」ために必要な知恵の獲得をもつこと、すなわちリベラルエディケーションの精神（それはキャリアデザイン学部のコンセプトでもあるが）、が欠落している。

河合は、渡米時、カルチャー・ショックを受けて悩んでいる日本人から「アメリカ人は自己中心的だ」「不親切だ」と、心理学者としての彼に相談を受けた経験を持つ。アメリカ人からすれば、私も経験したことだが、日本人は顔が見えない。「意志決定をしない」「個人としての意見をもとめているのに、私ではわからない。聞いてみるという」「誠心誠意対応し回答を求めたのに、その後、なしのつぶてで極めて礼を失する民族だ」と言われ困ったことがあった。河合も日本人が「自我がない」「うそつきだ」と非難されたことがあるようだといっている。河合はこのような実体験を経て二つの文化を支えている考え方、つ

まり原理の相違、父性と母性の原理に気づいたようである。そして、彼は、父性原理の歴史的背景として一神教であるキリスト教の存在をあげている。一神教においては、善悪の判断が非常に明白である。これに対して、アニミズムや多神教の世界においては、明確な善悪の判断は難しく、それよりも、「うち」か「そと」かの判断が大切となり、多くの場合、それは運命的に決定されていると。

(13) (阿部謹也) 阿部は次のように説明している。欧米の強力な影響下、インディヴィデュアルという言葉が翻訳せざるをえなかったという事情のなかで、1884年に「個人」という言葉が誕生。1877年に社会と訳したソサイエティとあわせ、この概念について学校教育も行う（世間という言葉が公的な文書から消失）が、旧来の人間関係（世間）が支配的であったから、インディヴィデュアル（個人）の教育は抽象的にならざるをえず、建前に終始。学校教育ではワシントンの桜の木の話など西欧的な個人意識に基づいて、正しいと思ったことはどこまでも主張し続けると教えられながら、現実の社会においては「世間」のしがらみに巻き込まれている。知識人たちは、自己が西欧的な個人と思い、その立場で論文や評論を執筆しているが、日常生活の中の現実の自分は「世間」の中でその情理に合わせて生きているのである。執筆内容と現実社会との間の乖離に、ほとんどの知識人は今日においてなお気づいていない。（『学問と世間』阿部謹也 岩波新書 p15～を要約）

(14) 『世間とは何か』阿部謹也 講談社現代新書 1995 p23

また、『学問と世間 (p105)』では次のように述べている。私たちは常に世間に監視されている、会社、官庁、我が国の人間集団にはどこでも、世間が形成されている。自分がどの世間に属しているかを知らないと大人として暮らしていけない。その世間には三つの掟；贈与・互酬の関係、長幼の序、共通の時間意識（今後ともよろしく、先日はありがとうという外国にはない表現、本来個人は自分自身の時間を生きているはずなのに）がある。

(15) 『学問と世間』 p20

(16) 阿部は引用を交えつつ次のように詳述している

（『学問と世間』 p22～28を要約）。

洗礼によってキリスト教に改宗し自己の内面に目を開かされていった欧米人は、中でも優れた者たちは自分の生き方を古代末期のローマの哲学者ボニティウス（480～524年）の『哲学の慰め』などのラテン語の文献に求め、古典重視の伝統を生み出した。その後、個人は国家や社会と対決し長い年月をかけて市民として形成されていくのである。国によってその過程が異なるため、現在でも国によって個人のあり方はかなり相違するが、18、19世紀には西欧独自の市民が生まれている。その発端は十一世紀にあった。伝統的な農村集団から都市に逃れた人々が新しい時代の担い手になったが、当初彼らも自分が育った村の「世間」に属し、村の出身者などで構成される「世間」を当てにしていた。このような状況を見て、12世紀の初期スコラ神学者であるサン・ヴィクトールのフーゴー（1096～1141年）は教育論、あるいは読書論とも言うべき『ディダスカリコン（学習論）』を著し「世間」から自己の独立を求めた。『ディダスカリコン』に次のような文言がある「人間は、自分の文化的故郷を離れれば離れるだけ、真のヴィジョンに必要な精神的超然性と寛容性を同時に得、その故郷と、そして全世界とを、いっそう容易に判断することができるようになる。また、自分自身に対しても異文化に対しても、同様の親近感と距離感の組み合わせをもって、いっそう容易に判断を下すことができるようになるのである」（エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』下、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、1993年、p 138～139）。

(17) 阿部謹也『学問と世間』（岩波新書 2001 p111を要約）

(18) 阿部謹也の著作；『学問と世間』（岩波新書 2001）及び『世間とは何か』（講談社現代新書 1995）を参考にまとめている。

(阿部謹也)

また、欧米の個人と日本人とを比較して次のようにも阿部は説明している。

「世間は非言語系の知、理性は従属的位置しかもたない。日本人は西洋理性は理屈ではないという形で生活に持ち込まれたという形で納得している不思議な民

族。世間は情動や感情を納得させる世界であり、近代文学はこの世間と合理性のは狭間を多く描いている。(同書p109)」

「たとえばカントの「啓蒙とは何か」という書物の中で、上官の命令が間違っていた場合に部下のとるべき態度が論じられている。上官の命令が間違っていると考えた場合でも、部下はその命令に従わなければならない。さもなければ軍隊は成立しないからである。しかし軍務が終了したとき、その部下は上官の命令の誤りを公開の場で論じることができるとカントはいう。そして、その場合、彼は自分の理性を公的に使用しているのだというのである。日本の事情を考えてみよう。ある会社員が会社の経理やその他に不正を発見して、それを公的な場で指弾した場合、彼は間違いなく首になるであろう。そして、もしそのことが公的に論じられるようなことが起こった場合、彼の行動が公的な理性に基づくものだという者が日本にいたろうか(『世間とは何か』 p29,30)。

さらに、阿部は日本人の無常についても積極的な意味を与える。掟に縛られる個人が自己に忠実に個性的に生きようとするが、世間が抵抗し挫折する。そのときの諦観の念を「無常」という形で表現したとする(同P136)。

(19) 西尾幹二『個人主義とは何か』(PHP新書2007年9月18日 p102~105)を要約・一部修正。また、西尾は「個人では小心・意志薄弱、集団で大胆な日本人像」と題して、日本人の観光団について「ミラノのスカラ座の廻廊で売っている絵葉書やスライドの前に集まった日本人女性の一人は、あたりの人は静かで、黙然としているのに、たがいに大きな声で名前をよびあって、自分たちが衆人の注視をあびていることにもまったく気がつかない。飛行機のなかでも飛行機の乗客とは思えないほど野放図で大声。持参の食物をひろげ熱海に行く慰安旅行の車中のように周囲のなおもむきに頓着しない。まわりの人から自分たちがどう見られているかという意識がまったく働かない。それでいて一人でいるときは、自分の意思をはっきりさせず、臆病で曖昧な態度をとりがち。女性の留学生たちもドイツの男性から求められれば唯々諾々と誰にでも自分のアドレスを教えてしまい後で困ったことになっ

ている。最初にはっきりした態度をとることができない。それは欧州では決して非礼にはならないということに気づかない」といい、さらに、「他人に悪感情をもたれることを極端に恐れる日本人」に関し、「はっきり肯定したり否定したりすることは煙たがられ物腰や表情で拒絶を表現するのが日本人社会だが、日本以外では通用しない。日本人は自分も相手からできるだけ傷つけられず、おたがいに柔らかくつつまれているという孤立をおそれる心理がそこにある。欧州人は納得しないことは決して応諾せず、若い女の子でも意見が違えばはっきり《否》という。それでも、そのことで対人関係の円滑を欠いたり、気まずい思いを相手に与えたりしない」とし、そして「法に訴える欧米人、情に訴える日本人」に関して、会田雄次の実例を引いて、「日本人は個人的感情、情感の世界で生きる。隣からの騒音でもめたときは、欧州人は法で争う。都市条例違反だと文句をいうと、しこりがあまり残らない。日本でそれをやると喧嘩になる。日本では、嘘でもいいから、『うちに子供が病氣して、赤ん坊が寝ていまずので、ラジオの音をもうちょっと小さくしていただけませんか』と感情に訴える。そこに法の入る余地は全くない。(『陰陽文化論』『論争ジャーナル』昭和四十三年十一月号)」と指摘している。

個をベースとする個人主義についても(同P160)、「欧米のヒューマンイズムの根源が孤独と絶望と断念の思想に接しているからだとし、孤独のないところに人の相互の高度な理解というものは生まれえない。自己主張のせめぎ合う世界にしか、たくましい自己犠牲の宗教はうまれえない。欧州は「個人」が仲間集団にとじこめられずに、自律的に生きてゆくにふさわしい様式や型を世俗の「社会」が備えていると指摘。人間同士がそれぞれ孤立した個体として、おたがいにある距離をもって生きてゆくために、人間同士の横のつながりに、もう一つの縦の、垂直の軸が置かれている。神と孤独に対面する、そういう基礎体験が彼らの長い歴史を積み重ねの中にある。そこに強い「個」の源泉があるように思える」としている。

日本人の真の国家意識の欠如(同 p174)に関しては、「個人意識が育たないためであるとし、国家を暴力機構として弾劾することに慣れ、威勢のいい国家否

定論を個人の「自立」と誤解している。それは戦前の日本で、国家への忠誠と服従とをもって、唯一の統一原理とみなしたことへのリアクションであり、古い感情へのとらわれなのである。我が国の国家否定論は、親に庇護された家のなかで、赤子がだだをこねている構図によく似ている。自分が現にそこに住む日本への依頼心の表現でしかない。国家的エゴイズムが現にせめぎあう世界の修羅場を正視することが必要である。日本の知識人の意識が前近代的で、欧米的な意味での個人主義が身につけていない証左であり、個人と近代国家との合理的な関わり方の訓練も経験もへていない。「近代」を確立しない（ホンネ）で、「近代の克服」（タテマエ）の体裁をとらざるを得ず、その構成員たる個々人は混乱のなかを無自覚にいきているにほかならない」と喝破している。

なお、西尾は教育に関しても、「自分の子供だけがかわいいという愛情のエゴイズムに沈めんするのが日本の母親の特権である。子供は決して社会的に独り立ちする教育をされる機会がない。欧州の家庭では子供は常に外の社会へひらかれた教育をしつけられている。それは社会の秩序がそれを要求しているからだ（同 p143）」と述べている。

(20) 『日本とは何か』 堺屋太一、講談社 1991 p329

(21) 『空気の研究』 山本七平 文春文庫 1983 p63～65より抜粋

(22) (山本七平) 山本はさらに次のように述べている。

① おそらくわれわれのすべてを、あらゆる議論や主張を超えて拘束している「何か」；「空気」と呼ぶべき物がある。そしてそれを口にさせないのも「空気」である。いまの今まで「これは絶対にしてはならん」と言いつけ教えつけられたその人が、いざとなると、「やれ」と命ずる。そして「あのときの空気では、ああせざるを得なかった」と弁解する。自らの意志ではない何かに強制される。その空気の責任はだれも追及できないし、どのようにして、その結論に達したかは、探究の方法がないから、「空気」としか言えない。大東亜戦争ではそれで何百万人も命が失われた。その最高責任者、連合艦隊司令長官は、「私は当時ああせざるを得なかった」と答うる以上に弁疏（べんそ）し

ようと思わないのである。論理的な説明はいっさいない。むしろ、そのとき空気に反抗すると、軍には抗命罪があり、一般には村八分という抗空気罪がある。（山本七平「空気の研究」文春文庫 p15～19より抜粋）

② 周恩来首相が昔田中元首相に贈った日本人について「言必信、行必果、（これすなわち小人なり）、つまり、やると言ったら必ずやるサ、やった以上はどこまでもやるサと云って玉砕するまでやる」という言葉を送ったそうであるが、日本人の愚かさを見事に見抜いたものだった。“空気”に支配されて、「時代先取り」とかかって右へ左へと一目散に突っ走るのも、「言必信、行必果」的「小人」だということ。大人とはおそらく、対象を相対的に把握することによって、大局をつかんでこのようにならない人間のことであり、対象の相対化によって対象から自己を自由にとすることだと、知っている人間のことであろう。しかし、残念ながら、われわれは、対象を臨在感的に把握してこれを絶対化し「言必信、行必果」なものを、純粋な立派な人間、対象を相対化するものを不純な人間と見る。そして、純粋と規定された人間を絶対化して称揚し、不純と規定された人間をも同じように絶対化してこれを排撃する。臨在感的把握の絶対化が最も明確に出てくるのが、「死の臨在による」支配である。帝国陸軍の絶対的支配の基本がこれであった。民間にも明確に出てくるのが各種の「遺影デモ」およびそれと同様のやり方である。紙と感光液だけの物質にすぎないはずであるが、それに背くと、超法規的処罰を受ける。（同 p63～65より抜粋、一部修正）

③ しかし、「空気の支配」に全く無抵抗だったわけではない。少なくとも明治時代までは「水を差す」という方法を、民族の知恵として、我々は知っていた。この「水」は、伝統的な日本的儒教の体系内における考え方に対しては有効なのだが、疑似欧米的な「論理」には無力であった。昭和の悲劇とは、表面的には欧米的といえる仮装の論理に基づく「空気」の支配に対して、伝統的な「水」が全く無力だったことに起因している。そこにいたずらに文明化された日本の大きな危険があると、明治に内村鑑三が予見していた。（同 p87～88より、抜粋、修正）

(23) 旧約聖書のサムエルの記がその起源；『日本文

明のかたち 司馬遼太郎対話選集』、文春文庫 2007  
山本七平との対談より p222

(24) 三島由紀夫はこのような日本人の状況を認識していたがゆえに、切腹という行為でデモンストレーションを行った。

(25) 同上 p265

(26) 同上 『日本文明のかたち』を参考に作成

(27) 『日本とは何か』堺屋太一、講談社 1991 p140

(28) 同上 p145

(29) 同上『日本とは何か』を参考に小門が作成

(30) 『日本の無思想』加藤典洋 平凡社新書 1999 p266

(31) 同上p267

(32) 同上 p270

(33) 同上p280

(34) 『なぜ日本は行き詰まったか』森嶋通夫、岩波書店、2004 p2,3

(35) (森嶋通夫)

大正デモクラシーの時代は第一回目の機会であったが、逆の力が働き、日本的儒教精神が高揚し軍国主義に陥った。社会主義もみまごう計画経済、全体主義経済を実践することに帰結する。戦後は中国式儒教を持ち込むべきであったと森嶋は強く主張するが、米軍により超理想的な米国教育を持ち込まれ消化できず、極めて中途半端な教育改革となり、新しいエトスの形成は不首尾に終わった。三度目は70、80年代の経済のひずみの時代であるが、日本的シュンペンター・イノベーション理論の成功により乗り切った(『なぜ日本は行き詰まったか』森嶋通夫、岩波書店、2004 p14)。90年代以降今迎えているチャンスに、日本人は本当の自由主義や個人主義が理解できず、思想的貧血症状に陥っていると指摘している(同p17)。

(36) (森嶋通夫) 同 p5

(37) (森嶋通夫)

市場経済では寡占・独占により、政府主導の経済では政府とのなれ合いやえこひいきの度合いによって勝者・敗者が決定される。前者は経済学の問題としてルールの厳格化で公平性を保つが、後者は社会権力構造の問題であり解決は難しい。(同p11を要約)

(38) (森嶋通夫) 同 p9、

儒教はマックス・ウエーバが強調したように東洋のプロテスタンティズムといわれるにふさわしい合理的な倫理観をもっていたが、封建諸国を統一する力をもつに至らなかった。しかし、日本型の儒教である忠国愛君精神はそれに適合した。(同p3,4を要約)

(39) (森嶋通夫)

封建時代のあとに近代資本主義を建設した国は、米国のをぞいてほとんど例外なく上からの資本主義から出発している。イギリスも国家主導の時期があった。資本主義が成立するためには、封建的な領土分割を解消して国家統一を図らなければいけない。そのためには強力な中央政府が結成され全国に同じ法律に従い、移動の自由、職業選択の自由がどの地方でも同じように保証されなければいけない。(『なぜ日本は行き詰まったか』森嶋通夫、岩波書店、2004 p3)

(40) 森嶋通夫『なぜ日本は没落するか』(岩波書店1999/3 p50～57)を抜粋、要約。

(41) (教育基本法)

なお、審議会答申とは若干異なり、改正基本法は、旧法第2条(教育の方針)の大幅訂正追加の形をとり、第2条(教育の目標)と第3条(生涯学習の理念)に衣替えされた。自主自立についてニュアンスが十分盛り込めずトーンダウンしている観は否めない。文言上は次のように定められている。

第二条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

- 一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。
- 二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。
- 三 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。
- 四 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。

五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

第三条 国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。

（参考）旧教育基本法 第2条（教育の方針） 教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場所において実現されなければならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、実際生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献するように努めなければならない。

(42) 「心の習慣」 ロバート・ベラー 島藺進 みすず書房 p147、150

(43) ロバート・ベラーは、中産階級という言葉の背後に、非人間的な関係性が隠れており、キャリア（職業上の昇格）という言葉にそれが集約されているとしている（同 p144）。

#### 参考図書

学問のすすめ 福沢諭吉 岩波文庫 1942  
 学問と「世間」 阿部謹也 岩波新書 2001  
 「世間」とは何か 阿部謹也 講談社現代新書 1995  
 教養とは何か 阿部謹也 講談社現代新書 1997  
 日本人と日本社会のゆくえ（河合隼雄著作集11） 岩波書店 2002  
 日本文明のかたち 司馬遼太郎 文芸春秋 2006  
 人間というもの 司馬遼太郎 PHP文庫 2004  
 「空気」の研究 山本七平 文春文庫 1983  
 「日本文化論」の変容 青木保 中公文庫 1999  
 人間を幸福にしない日本というシステム カレル・ヴァン・ウォルフレン

毎日新聞社 1994

日本とは何か 堺屋太一 講談社 1991  
 なぜ日本は行き詰ったか 森嶋通夫 岩波書店 2004  
 なぜ日本は没落するか 森嶋通夫 岩波書店 1999  
 日本のフロンティアは日本の中にある「21世紀日本の構想」懇談会 河合隼雄 講談社 2000  
 タテ社会の力学 中根千枝 講談社新書 1978  
 タテ社会の人間関係 中根千枝 講談社新書 1967  
 個人主義とは何か 西尾幹二 PHP新書 2007  
 比較文化論の試み 山本七平 講談社学術文庫 1976  
 日本資本主義の精神 山本七平 ビジネス社 2006  
 資本主義の終焉 佐和隆光 岩波新書 2000  
 和魂米才の発想法 木村剛 DMDJAPAN 2006  
 日本人の法意識 川島武宣 岩波新書 1967  
 規制改革 川本明 中央公論 1998  
 定常型社会 広井良典 岩波新書 2001  
 無縁公界楽 網野善彦 平凡社 1996  
 日本の歴史をみなおす 網野善彦 ちくま学芸文庫 2005  
 日本の思想 丸山真男 岩波書店 1961  
 論壇の戦後史 奥武則 平凡社 2007  
 甘えの構造 土居建郎 弘文堂 1971  
 名誉と順応 池上英子 NTT出版 2000  
 日本型資本主義と市場主義の衝突  
 ロナルド・ドーア 東洋経済新報社 2001  
 健全な市場社会への戦略 八代尚宏 東洋経済 2007  
 人口減少経済の新しい公式 松谷明彦 日本経済新聞社 2004  
 美しき日本の残像 アレックス・カー 新潮社 1993  
 日本の無思想 加藤典洋 平凡社新書 1999  
 心の習慣 ロバート・ベラー 島藺進訳 みすず書房 1994

※本稿は、学会紀要第5号「キャリアデザインの時代Ⅰ・Ⅱ」の続編である。